Series

もうひとつの都市（まち）の中へ 2

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より

Photo & essay Koshi Matsumoto

Series
もうひとつの都市（まち）の中へ 2

記憶の片隅に眠っていた光景

キラキラと眩しく光るサーチライトの下、カメラを担ぎ、新幹線操車場のでこぼこした線路を心細げに歩いていると、若き日のヴィム・ヴェンダースの映画「さすらい」を思い出しました。
偶然出会った映画技師と自称小児科医が旅をするロードムービーです。スクリーンに映し出されているのは、モノクロームの退廃的な光景たち。そこには、まるで時間的な観念が存在しないかのようにも思えました。
ただひたすら、何気ない風景だけが目の前を無造作に通り過ぎる。でも、この何気ない退廃的な風景こそが、どこか懐かしく、印象的であり、心の渇きを癒してくれるものではないでしょうか。私たちは旅先で、この何気ない風景たちを無意識にさがしているのかもしれません。

外国で旅と言えば、広大な大地を自動車で駆けめぐるヒッチハイクを想像しますが、日本では、やはり「鉄道」なのです。電車に乗り、住み慣れた今いる場所から、何処かにある、もうひとつの場所を求めて旅立つ。それは郷愁への旅でもあり、希望を求める何かへの旅でもあるはず。
鉄道での旅には、それらの思いを大いに盛り上げてくれる演出が数多く存在します。線路沿い、あるいはプラットホームから見える駅舎内の片隅に植えられたコスモス、ひまわり、そして自ら群生するセイタカアワダチ草。それぞれの季節の風でこうべをゆらす光景は、過ぎ去った記憶へのいざないのようにも感じませんか。
映画の中の主人公たちの旅もそろそろ終わりに近づき、やがて国境にたどり着きます。国境には、何もない退廃的な風景がどこまでも続いているだけでした。でも、それらを見たことで、また新しい旅路が必要であることを主人公たちは悟るのです。

突然警笛がなり、赤い虚ろな目玉が鋭い光に変わると、僕の目の前に止まっていた車両はゆっくり動き始めました。
新幹線の車両の形は、時代と共にずいぶんと変わりましたが、情緒的でどこか懐かしさを感じるあの警笛の音色だけは、東京オリンピックの時代から全く変わっていないのです。
操車場から出ていく新幹線を見送り、今宵の僕の小さな旅路も終わろうとしていました。

撮影協力　JR東海（株）

Profile
松本コウシ Koshi Matsumoto
1961年広島生まれ。
大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。
夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」「ウイークエンド」「記憶への旅」「肖像権」などの著作がある。
日本写真家協会・日本写真協会会員。